

派遣者番号	R3K11	氏名	寺本 大一
研究主題 —副主題—	社会科学習における自己の学びを調整する力に着目した 「主体的・対話的で深い学び」の追究 —小学校社会科「工業単元」の授業実践を通して—		
派遣先	東京学芸大学 教職大学院	担当教官	大澤 克美
所属	文京区立本郷小学校	所属長	溝畑 直樹

キーワード：自己調整 主体的・対話的で深い学び 工業

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

近年、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等、予測困難な時代を迎えている。学習指導要領では、目指す資質・能力を三つの柱に整理し、「何ができるようになるか」、「どのように学ぶか」を一層重視している。また、その実現のためのアプローチの一つとして、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を推進することが求められている。

しかし、中央教育審議会の答申（2021）では、コロナ禍に伴い、学校の臨時休業中、子供たちは、学校や教員からの指示・発信がないと、学びを止めてしまうという実態が見られたことから、これまでの学校教育では、自立した学習者を十分育てられていなかったのではないかという指摘をしている。

また、OECDでは、“Learning Compass 2030”の中で子供たちがウェルビーイングを実現していくために自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動がとれる力を身に付けることの重要性を指摘している。

実際に小学校現場では、教員から教わることを学びとする依存的な子供が多く見られた。また、教師がレールを敷き、そのレールから子供たちがはみ出さないように走らせるという授業を多く参観したり、自身も実践したりしてきた。

これらのことから、これからの時代に求められる資質・能力を「子供たちが自ら問いをもち、自ら考え、判断し、行動したり問題解決したりすること」であると捉え、その資質・能力の育成のためには、自律的な学びが必要であると考えた。

本研究では、子供たちの自律的な学びを実現するために、自己調整学習に着目する。Zimmerman(2006)は、自己調整学習を「動機付け・学習方略・メタ認知の3要素において自分自身の学習過程に能動的に関与していること」と定義している。これら3要素は、「自ら学ぶ力」を育成し、自律的な学びを実現すると考えた。

具体的には、小学校社会科学習における自己の学びを調整する力を重視し、授業実践によって、どのように子供たちの主体的・対話的で深い学びを生み

出すのかを明らかにする。また、その中で自己の学びを調整する力の実体について考察し、社会科学習におけるその働きや意味、可能性を明らかにすることを目的とする。

2 研究の方法

小学校社会科第5学年「これからの工業生産とわたしたち」において、3学級を実践の対象とした。本研究では、先行研究を踏まえて、自己の学びを調整する力を高めるための五つの手だてを考え、授業を構成した。

(1) 教材開発

モデル学習・4つの事例から工業製品を選択するなど、子供たちにとって興味・関心がある教材を開発した。

(2) 学習方略

学習形態の選択・調べる手段の選択・まとめ方の選択を通して、自らの学習をより効果的なものにする工夫や方法を調整できるようにした。

(3) 自己の学びの調整

自己調整学習の望ましい進み方の予見・遂行コントロール・自己省察の3段階（伊藤, 2004）のサイクルを促すために、学びのデータチャートとルーブリックを活用した。

(4) 交流

意図的で協働的な学びの場の設定やジグソー学習を取り入れ、他者の意見もヒントに自己の学びの調整の充実が図れるようにした。

(5) 指導と評価の一体化を目指す形成的評価

個々のノートや学習カードにコメントを書いてフィードバックすることで、自己調整を促すようにした。

分析の方法として、二つの分析方法を用いる。児童の学習カード・ノート、事後アンケート、授業者に対するお礼の手紙などを基に分析する。

第一に、事後アンケート（表1）の項目を基にA～Hのタイプ別に分け、各タイプにおける特性について記述を基に分析する。（表2）

第二に、第一の分析を基に異なるタイプ（A・B・

F・Eタイプ)から特性が見られる児童4人を選択し、学習ノート・学習カードの記述を基に、子供の自己評価だけでなく、授業者からの評価も合わせ、児童の変容や自己の学びを調整する力を働かせて深い学びを生み出しているのか、深い学びの妥当性について分析する。

表1 事後アンケート

【授業アンケート】			
1～4に○をしてください。自由記述のところには、自分の考えを書いてください。			
①「工業生産とわたしたち」の単元では、自らすすんで学習に取り組むことができましたか？			
よくできた	できた	あまりできなかった	できなかった
1	2	3	4
②「工業生産とわたしたち」の単元の学習では、学びが深まったと思いますか？			
よくできた	できた	あまりできなかった	できなかった
1	2	3	4
「よく思う」・「思う」と答えた人は、それはなぜですか？			
③『自己調整学習カード』を通して、自分の学習の仕方や自分の考えについて見直し、次の学習につなげられましたか？			
よくできた	できた	あまりできなかった	できなかった
1	2	3	4
④今回の授業の学び方は、これまでの社会科の授業と比べてどうでしたか。やってみて楽しかった、考えが深まったり、学びやすかったりするなどの良かったところ、難しかったり、わからなかったりしたなどの授業の感想を聞かせてください。また、どうしてそう思ったのか理由も教えてください。【自由記述】			

表2 タイプ別表

分析タイプ	人数(割合)
A: 深い学び・自己調整どちらも「よくできた」	31人 (31%)
B: 深い学び「よくできた」・自己調整「できた」	21人 (21%)
C: 深い学び「できた」・自己調整「よくできた」	10人 (10%)
D: 深い学び・自己調整どちらも「できた」	15人 (15%)
E: 深い学び「よくできた」・自己調整「あまりできなかった」	2人 (2%)
F: 深い学び「あまりできなかった」・自己調整「よくできた」	4人 (4%)
G: 深い学び「あまりできなかった」・自己調整「できた」	11人 (11%)
H: 主体的「あまりできなかった」	4人 (4%)
※3名は、事後アンケート未提出	計100人

3 研究の結果

第一分析において、八つのタイプ別に記述分析したところ、アンケート項目の「学びを深めることができたか」の質問に対し、「よくできた」・「できた」と回答した児童の共通点は、3点あることが分かった。第一に、「自らすすんで学習に取り組めたか」の質問に対し、全員が「よくできた」・「できた」と回答していた。第二に、学びが深まった理由に、友達との交流できたことを挙げている児童が約6割と多いことや積極的に対話する姿が見られた。第三に、自己の学びを調整する複数の手だてを学びが深まった理由に挙げた児童が8割と多く、それら手だての相互作用で学びを深めることができていた。

また、第二の分析方法について、A・B・Eタイプの児童は、第一の分析方法における3つの共通点にすべて当てはまっていた。学び方では、自分自身に合った最適な学び方を調整する姿が見られた。学習内容に関しては、資料や協働的な活動を通して、これからの工業の在り方について、生産者・消費者の立場から多角的に捉えることで考えを深め、学びの変容が見られた。これらことから、授業者の評価

は、十分に満足できる状況であると判断した。

Fタイプの児童は、「学びを深めることができたか」の質問に対し、「あまりできなかった」と回答しているが、第一の分析方法の3つの共通点にすべて当てはまっていた。しかし、学び方では、自己の学びを調整しながら最適な学び方を求める姿は、あまり見られなかった。また、学習内容では、これからの工業の在り方について、生産者・消費者の立場から多角的な捉えることはできたが、明確な理由の記述が見られなかった。そのため、授業者の評価は、おおむね満足できる状況であると判断した。

4 研究の考察

第一の分析方法であるタイプ別の記述分析の結果、自己の学びを調整する力が高まり、学びが深まった理由を複数挙げている児童ほど、深い学びを実現させていたことから、自己の学びを調整する力は、主体的・対話的で深い学びを生み出すことと深く関わっていると考える。特に、学習プロセスの中で、自己の学びを調整する複数の手だてを相互作用させることによって、自らの学びを自覚化し、児童自身が学びをコントロールすることで、学びを深めることにつながっていたと捉える。また、自己の学びを調整する力と主体的・対話的な学びとの関係から、深い学びを実現することができたと捉える。

社会科における自己の学びを調整する力の実体は、2点あると考える。

第一に、既習事項や資料、友達との交流から学んだことを基に学びを構成することを繰り返し、学習内容における学びを深める姿が見られた。このことから、学習内容における自己調整の力が働いていると考えられる。第二に、小単元の学習の中で学習方略を選び、自分に合った最適な学び方を展開することで、学習内容により迫っている児童の姿が見られた。このことから、学び方における自己調整の力が働いていると考えられる。

このように、学習内容における自己調整、学び方における自己調整の二つが社会科における自己の学びを調整する力の実体であり、この二つの相互作用によって、主体的・対話的で深い学びを実現することが可能であると考えられる。

5 今後の展望

本研究で明らかになった自己の学びを調整する力と主体的・対話的で深い学びの関係性や自己の学びを調整する力の実体は、社会科の他の単元や他学年、他教科等にも生かすことができると考える。所属校をはじめ、区や東京都等において伝達・共有し、研究成果の普及・啓発を通して、日々の授業改善や児童理解に役立てていく。